

リンゴのカルテック施肥例 (10アール当り)

時期	目的	資材と施用法
収穫直後 (10月下旬～ 11月上旬)	樹勢の回復 養分貯蔵促進	濃縮酵素液 500倍で葉面散布 特に疲れている場合は 3～5リットルを灌水 (300 倍程度) ※根の働きを強くすると、根は落葉直後まで動き、葉の光合成は落葉前まで活発に継続して、デンプンを枝幹・根に蓄え、翌春の生長の源となります。 9月下旬～1月中旬に休眠している芽は、デンプン蓄積が多いと、寒さにあうにつれて(ハードニング)、耐寒性が高まります。 特に耐寒性を強めるには カルテックCa液状 葉面散布。
元肥 落葉後～ 春、動き始める前 (11月～3月) ※なるべく早め、 11月の施用が 効果大きい。 積雪などで、春 に施用するなら 3月に遅れない ように。	1年分の基本と なる地力作り (一年分の栄養を、 ほぼ補給) ※右記4種を同時 に投入し、なるべく 土と混ぜて下さ い。 ※施肥位置は 樹 の近くだけでなく、 根の届く範囲、 全体にムラなく	ラクトバチルス 600グラム 米ヌカ 200kg ※ 堆厩肥 1トン(以上)の投入を すすめします 硫安 60～80kg ※特に痩せ地で 有機物不足の場合は、硫酸カリ20kg 追加。 ※複合有機肥料を使う場合 チツソ成分 12～16kg とします。 畑のカルシウム 60～80kg ※施用量は 原則として 硫安(チツソ)の量と同じ(以上)に。 ※土壌pH:5. 5～6. 5の範囲、なるべく6. 0を目標とします。酸性 には かなり強いものの、春～秋にpH:5. 5以下だと枝先が弱く、 展葉・開花が揃わず、落果が多くなります。
春先の根の 強化 (3月) ※3月に樹液が流 動しはじめ、根 が動きはじめま す。この時に…	春の芽、葉、花 を強く動かす	濃縮酵素液 3～5リットルを灌水 (300 倍程度) ※根と導管の動きを強くし、(4月)発芽・展葉を促進します。 (5月)開花が一斉にそろい、目立って結果が良くなります。 ※もし秋冬の元肥が不足(EC:0. 1)の場合は 硫安 20kg ※もし秋冬のカルシウムが不足(pH:5. 8以下)の場合や、チツソ過多 (EC:0. 5以上)の場合、樹勢が強すぎる場合は、 <u>展葉中迄に畑 のカルシウム 20kg(～40kg)</u> を施します。 カルシウムは 花の受粉・着果・細胞分裂・初期の果実形成・生理 的落果(ジューンドロップ)の防止に 極めて重要です。
肥大中の コントロール (6～8月)	(6月)果実肥大 (7月)花芽分化 (8月)花器形成 (8月下旬)新根	濃縮酵素液 500 倍 葉面散布 …根の強化、樹勢維持、新梢の充実 カルテックCa液状 500 倍 葉面散布…樹を落ち着かせる カルテックCa液状 500 倍 葉面散布 7日間隔で繰返し (適宜、灌水) 濃縮酵素液 500 倍 葉面散布
秋肥 (9月)	果実肥大と、 樹勢の維持	硫安 20kg 畑のカルシウム(または カルテックCa粒状)20kg ※土壌EC:0.2以下(硫安施用後0.4迄)、葉中チツソ3.7%前後の範囲内 で、状態によりチツソとカルシウム量を調節します。 ※カルシウムが不足すると 貯蔵中の果実にビターピット(苦痘病)、 ゴム病、樹皮に粗皮病(Mn過剰)が発生しやすい。
収穫20日前 (10月)	果実の仕上げ	カルテックCa液状 500 倍 葉面散布…成熟促進、増糖・着色

※液剤の葉面散布は状態により 2回(以上)繰返し。特に強く効かせる時は 灌水施用。

※モンパ病の対策…

ひどい場合は まず根を掘って濃縮酵素液(1本当り)1リットルを 100倍に薄めて灌注し、根を洗います。
3～4日後、ラクトバチルス30グラムを米ヌカ7kg に混ぜて、散布し、覆土します。その後、7日ごとに2回、濃

縮酵素液300倍の灌注して下さい。